

愛宕山林野火災

— 宮崎県延岡市 —



昭和59年2月7日

延岡市消防本部

は　じ　め　に

この記録は、昭和59年2月7日15時20分頃当市において発生した林野火災の概要を収録したものです。当市は、地理的に三方を山に囲まれており、また気象的な条件から林野火災の発生しやすい環境にあり、過去幾多の災害により多くの被害を蒙っております。

このたびの林野火災におきましては、多大なご心配をおかけいたし心あたたまるお見舞やはげましのお言葉等をいただきますとともに火災発生後、関係機関延6,000人による徹夜の消火活動、自衛隊の皆さんの空と陸からの消火活動により2月11日15時00分鎮火させることができました。誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

今回の火災は、強風にあおられ悪い気象条件の中での消火活動で84.04ヘクタールの山林を焼失しましたが、民家への延焼、人身の損傷がなかったことが不幸中の幸いでした。

今後は、これらの災害から市民の生命、身体、財産を保護するため当市では、従来から防災体制の充実強化に鋭意取り組んでいるところでございますが、これを機に今後さらに災害対策に万全を期するよう努力いたしたいと存じます。

この記録が林野火災防ぎょ上の参考資料として活用されることを期待しますとともに本記録の収録に当りご協力いただきました関係機関をはじめ報道機関の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和59年3月

延岡市消防本部

消防長　加　藤　聡

目 次

1	延岡市の概要	1
2	愛宕山の概要	4
3	火災の概況	6
4	防ぎよ戦術	8
5	広報宣伝活動	20
6	指揮本部の設置	21
7	警察署の警備活動	21
8	自衛隊の活動	22
9	ヘリコプター隊の空中消火活動	25
10	炊き出しの状況	27
11	ヘリコプターによる消火剤の散布状況	28
12	消火剤の使用状況	29
13	消火剤攪拌作業従事人員	29
14	総出動人員	30
15	出動車両及び放水車両	31
16	防ぎよ戦闘図	32

延岡市愛宕山林野火災

— 宮 崎 県 —

1. 延岡市の概要

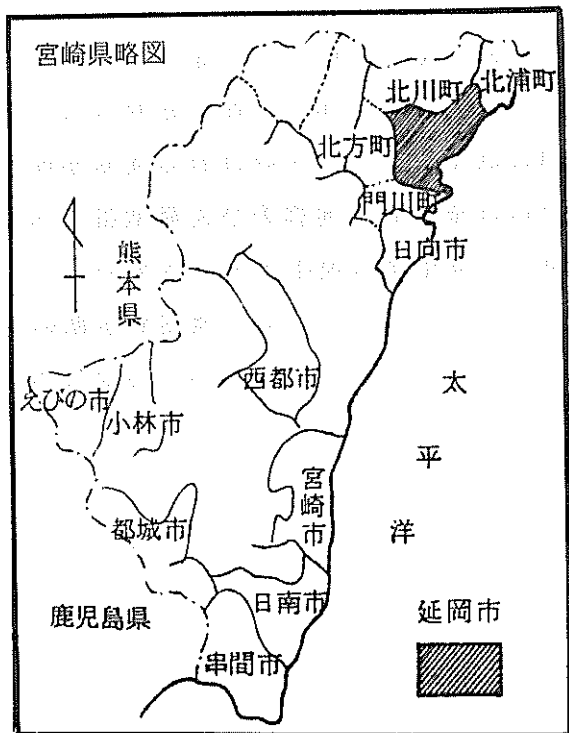
(1) 地 勢

本市は宮崎県の北部に位置し、九州南部を南西から北東にかけて斜走する山地が、宮崎市から日向に至る平坦な海岸線と交差する部分にあたる。東は太平洋に面し、北方にかけては九州山脈が県境に横たわっている。本市を貫流する主要河川としては、九州山脈に源を発して東流する五ヶ瀬川、大崩山を源とする祝子川、大分県から南流する北川とがあり、いずれも分流、合流をなして河口を一にして太平洋に注いでいる。本市はこの恵まれた河川により工業都市として発展しているが、市街地は地形上これらの河川によって沈積した低地である。

本市の平均気温は16℃、年間降雨量2,000ミリを超え、九州でも温暖多雨の地域である。11月に入ると、北西の季節風が吹きはじめ12月から2月までの冬の期間は高千穂おろしと呼ばれる強風が吹き荒れる。また宮崎県とその周辺は全国的に地震のひん発地帯であり、なかでも日向灘は大規模な地震が発生する地帯とみられている。

このため台風や集中豪雨による風水害をはじめ、地震や冬期の季節風による大火の防止等に対する防火体制の充実が特に必要な地理的条件下にある。

(2) 延岡市の位置



位 置

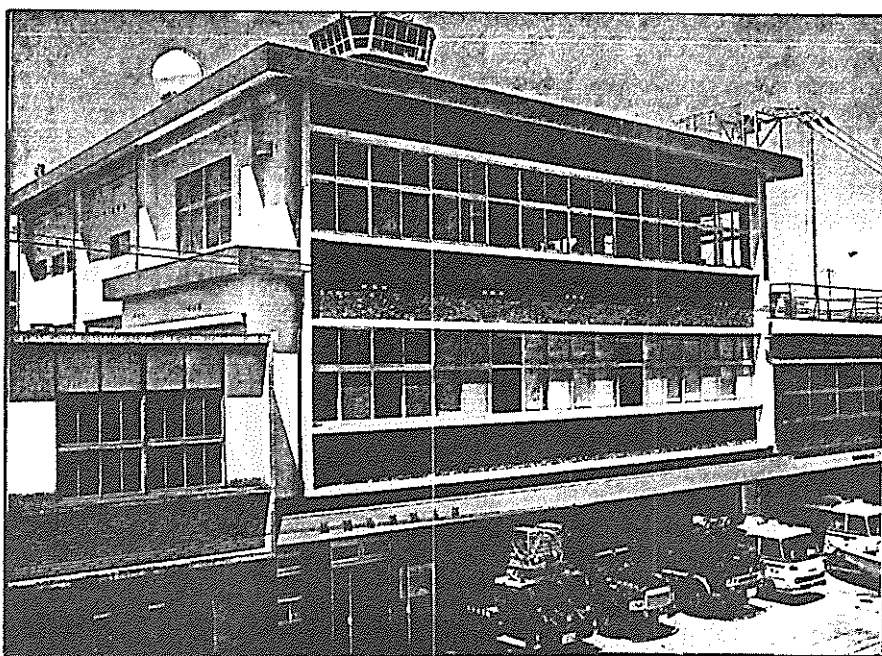
東 経	北 緯
131°40′	32°40′

広 さ

面 積	東 西	南 北
287.40 ^{km²}	27.6 ^{km}	26.4 ^{km}

(3) 消 防 防 災

本市は昭和39年1月、新産業都市指定を受け、これに基づき重化学工業及び地場産業を中軸とした近代工業都市としての町づくりを行うとともに生産と生活の調和のとれた安全で住みよい地方都市づくりを目標としているが、化学工場が市街地に散在している実情や、生活資材用品の石油製品化、建築物の高層化、救急需要の増加等、人為的な要素による防災上の課題が増加しつつある。従ってこれらに対応して都市の安全を守る消防の業務は重要なものとなっている。



2. 愛宕山の概要

愛宕山は国鉄延岡駅から南へ約 3.5 km の位置にあり、標高 251 m、面積 223 ha で東西約 2,100 m、南北 1,600 m の独立した山である。

この山の林相は、イチイガシ、シイ、タブ林とスギ、ヒノキ、アカマツ等の植林地及びクヌギ等である。

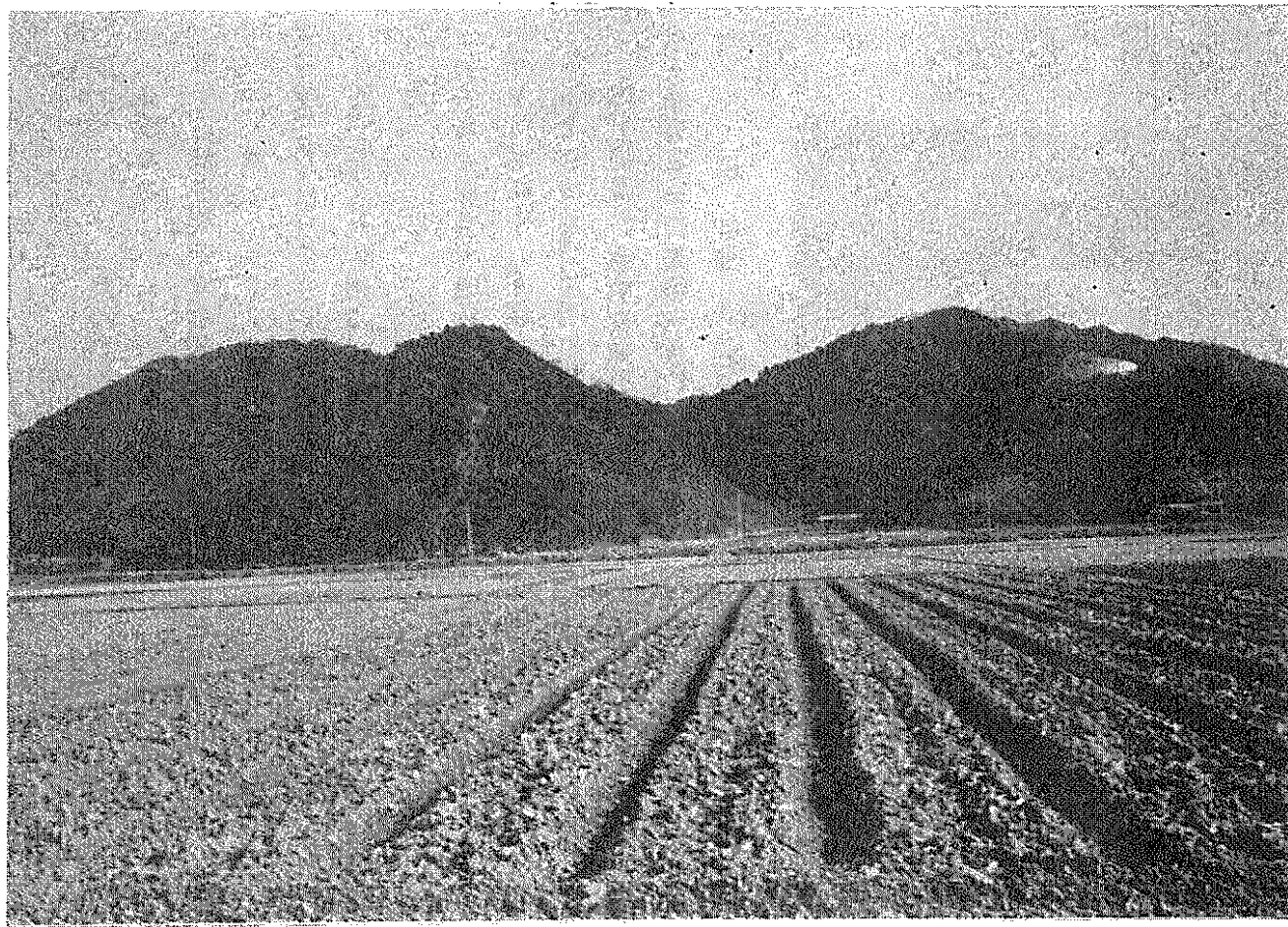
地形は東西に走る主陵線から南北に幾重もの尾根と谷筋を形成し、東部では急傾斜をなしている。

東尾根には市立の展望台があり市内一円、太平洋を一望でき頂上にはNHK及び民間放送2社のテレビ塔と電々公社の中継所がある。これらに通じる舗装道路が北山麓の市道に接して設けられている。

南斜面中腹の遊歩道にはサザンカが植えられ四季を通じて市民の「憩いの場」として親まれている山である。

周囲は、西部及び南西部を除き住家が密集しており、特に東部は旧国道添に市街地となっている。

近年は、南東山麓を中心にして、宅地開発が進み団地も形成されている。



県道（三須－土々呂停車場線）から見た愛宕山

3. 火災の概況

出火場所 宮崎県延岡市愛宕山 108 - 1
出火日時 昭和 59 年 2 月 7 日 15 時 20 分頃
覚知日時 " " 15 時 31 分
鎮圧 " 2 月 9 日 16 時 00 分
鎮火 " 2 月 11 日 15 時 00 分
焼失面積 84, 04 ヘクタール
損害額 109, 900, 000 円
出火原因 調査中
気象状況 観測日時及び場所

昭和 59 年 2 月 7 日 15 時 20 分現在

延岡測候所

天候 快晴 気温 2.4℃ 風向 西
平均風速 3.6 m/sec 最大風速 8.0 m/sec
相対湿度 36% 実効湿度 48%
過去 1 ヶ月間の降雨量 56.5 mm
事前 10 日の降雨量 30 mm
最終降雨日からの経過日数 7 日
火災警報発令 無
2 月 7 日 15 時 30 分の瞬間最大風速 15.2 m/sec
" 17 時 00 分の " 16.2 m/sec

◎気象情報◎

2 月 3 日 14 時 00 分異常乾燥注意報発令
2 月 6 日 7 時 50 分 " (継続中)

◎降雨の状況◎

2 月 11 日 0.0
2 月 12 日 6.5
2 月 17 日 8.0



★ 通報及び初期消火の状況 ★

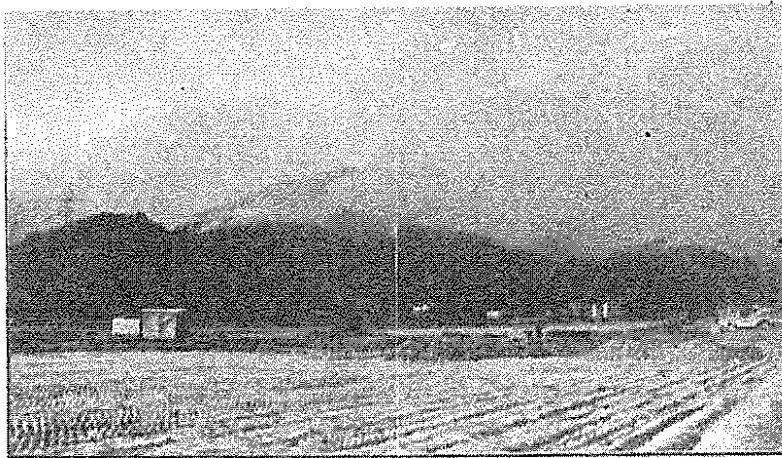
第一発見者のA子（延岡市小野町 4625-2 ）は、出火点の南南西約 500 m の県道三須、土々呂停車場線で発見し、たまたま自動車を通りかかったB子（延岡市小野町 4877-1 ）に 119 番通報を依頼した。一方依頼を受けたB子は約 200 m 離れた自宅に帰り 119 番通報したものである。

初期消火はなされておらず前述県道で水道管埋設工事中の作業員の証言ではまたたく間に延焼拡大している。

119 番への通報内容は、「小野町冷尻山林火災」であり、受信した指令室員は特令出場指令を「山林火災防御計画」に基づき発令した。

指令に基づき本署隊及び管内南延岡出張所合せてタンク車 2 台、ポンプ車 1 台、小隊長以下 15 名が出場し、愛宕山西部の横谷経由で 15 時 41 分現場到着したときの出火場所は、シダ、松等が風にあおられ炎上しており谷を吹き上げる 5 m を越える風によって火の粉が東側に飛んでいる状態であった。

先着 3 隊は、出火場所付近の進入路にタンク車を配置し、ポンプ車からの中継を受けながら注水消火を図ったが火勢に押され注水範囲内に予備注水をするのみで退却を余儀なくされた。



4. 防ぎよ戦術

後着した指揮者は、火災の拡大を予想し非番職員と消防団員の召集を決定し15時52分サイレン吹鳴を無線で指令室に指示するとともに「指揮本部」を出火場所の通称土々呂谷入口に設け防ぎよの方針を愛宕山山麓の人家への延焼阻止を最重点とすることを決定し、後着隊へ指示を行った。

また西丘陵地には、市内銃砲店所有の火薬庫2棟に合計1トンの火薬が貯蔵されており延焼危険が懸念されたため、付近の河川にポンプ車を部署しホースを延長して集中的に防ぎよに当たった。

一方貯蔵されていた火薬は、延岡警察署の指示で「旭化成工業株式会社」の火薬庫に移動し爆発危険は排除され火災防ぎよに専念できた。

15時57分、2回目の召集サイレンを吹鳴し、続々と集結する消防隊が、速度を加え延焼拡大する火勢に対して守勢にまわらざるを得ない状況の中、防ぎょ活動を決定された方針により、片田町の人家と宅地開発された北団地を最重要防ぎょ面とした。



本部は、425名の隊員を20～30名の小隊編成して燃え下りによる人家への延焼危険区域を中心に配置し、河川、池、貯水槽、井戸、消火栓等あらゆる水利を活用し直接消火あるいは予備注水を行った。



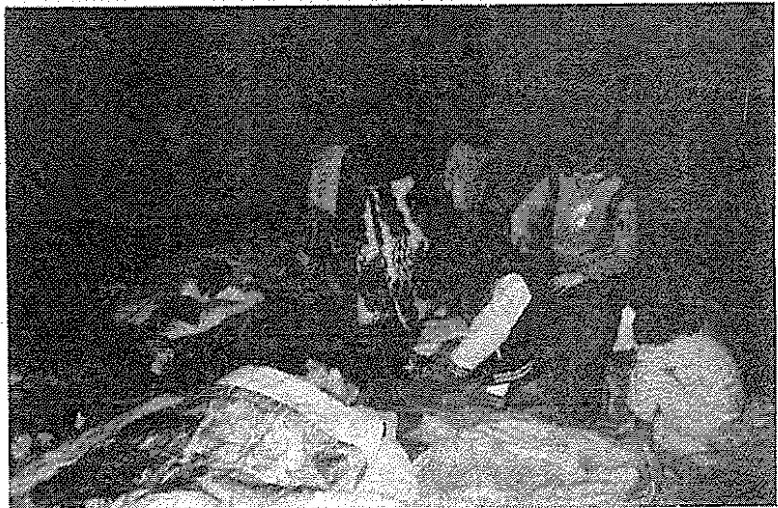
(1) 消防隊の活動状況

16時00分 消防団恒富分団42名は、横谷方面の延焼阻止のため小型動力ポンプを沖田川に水利部署しホースを延長し消火活動を実施した。

16時30分 消防団土々呂分団125名は、「みどり学園」付近の延焼防止のため「池」に水利部署し防ぎよに当る。

17時30分 延岡市児童福祉施設「みどり学園」の園児44名は、

延焼危険のおそれがあるために徒歩で自主的に避難した。

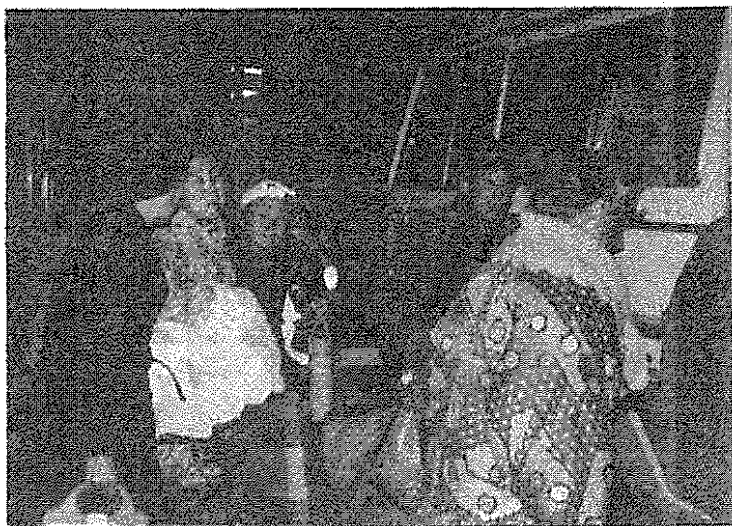


18時05分 消防団中央分団69名及び南方分団235名は西斜面への延焼拡大が著しいとの情報で小隊単位に分散して配置し消火活動を行う。

18時40分 消防団東海分団171名は片田町及び周辺団地が延焼危険との情報で小型動力ポンプを消火栓あるいは水槽に配置し、中継態勢で消火活動を行う。

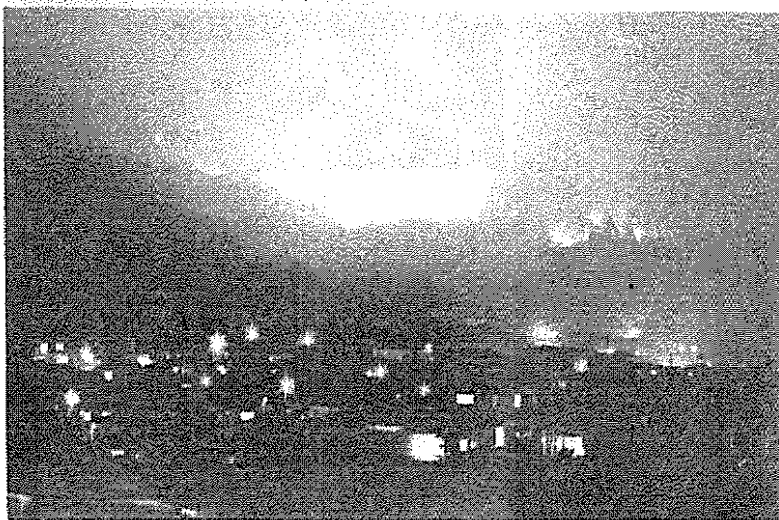
19時27分 消防団南浦分団250名は、各方面隊からの情報で消防力の弱い部署に応援出動を行う。

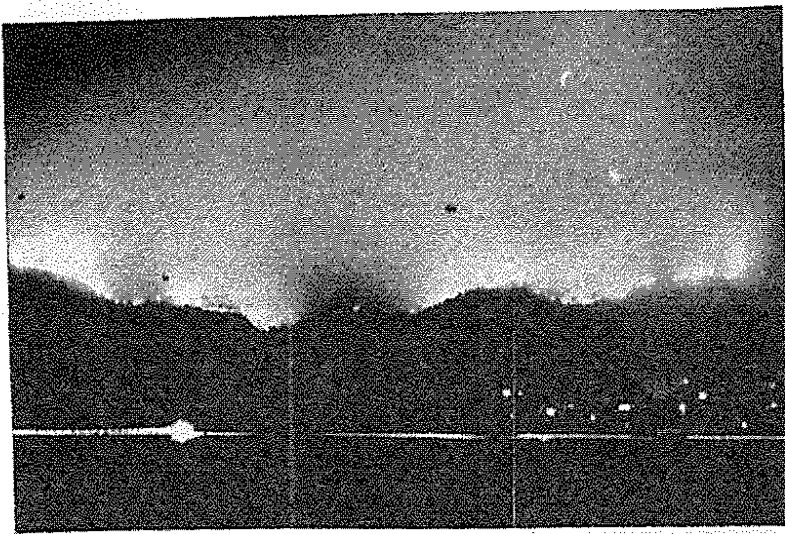
19時50分 消防署は、延岡市福祉施設老人ホーム「若葉荘」の



老人81名を署
所有のマイク
ロバスで2.5
キロメートル
はなれた消防
本部に収容し
た。

21時30分 山頂テレビ塔付近一帯に延焼危険が強くなり、タン
ク車1台を配置増強する。

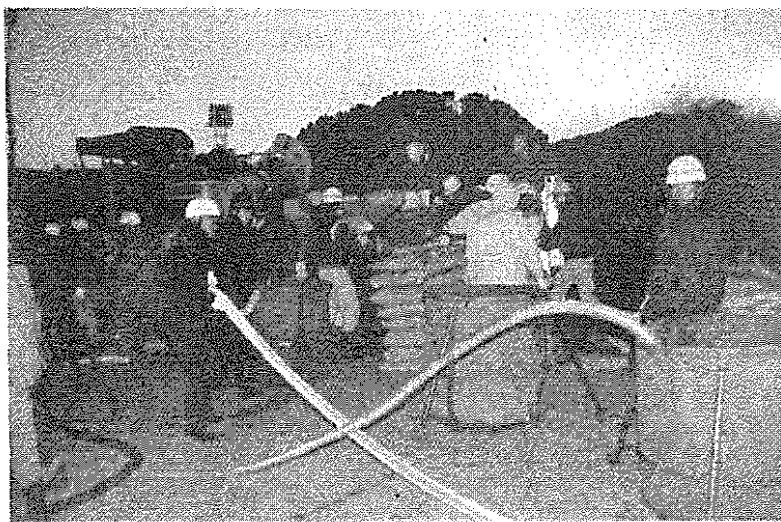




22時50分 寒気で登山道凍結のおそれがあるため凍結防止剤散布を市土木課に要請し散布した。

これらの防ぎょ活動は、夜を徹して行われ転戦に次ぐ転戦であった。このため、現場指揮本部は現場指揮者に対し消防隊員の疲労と林野火災特有の危険性からの安全を確保するよう指示した。

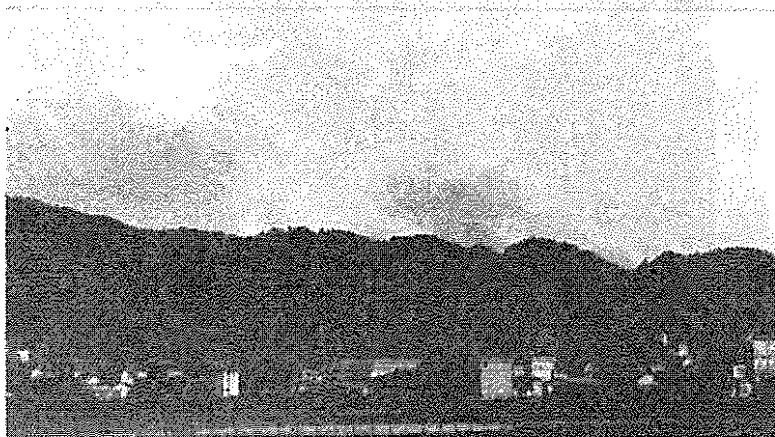
2月8日 6時00分 空中消火のためヘリコプターに搭載する消



火薬剤の攪拌作業は関係機関の職員が当った。

2月8日の主な活動状況は、消防署、消防団とも交替で休息をとりながら防ぎよ活動に従事した。

朝の気象状況は風速 1.8 m/sec 、湿度40%であったが10時頃から $4 \sim 5 \text{ m/sec}$ の風になり至るところで再燃と延焼拡大の状況を呈した。



9時47分 消防隊22名は、北斜面からの防ぎょを展開するため



古城町水道
第一配水タ
ンクから登
山頂上テレ
ビ塔へ向け
て転戦しな
がら消火活
動を行った。

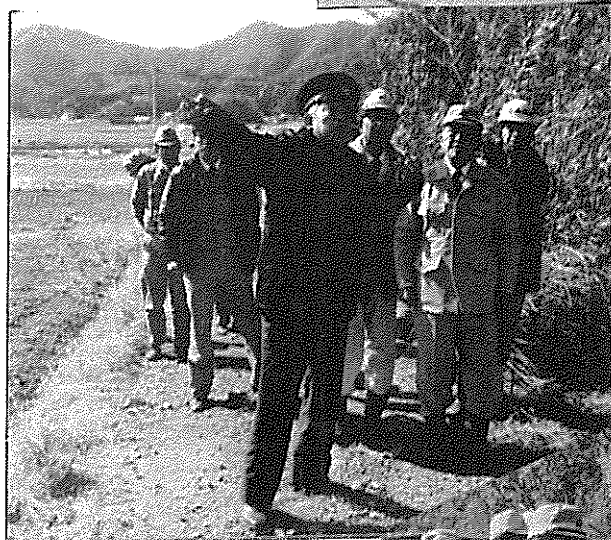
10時00分 消防団は、延焼拡大している北西斜面へ主力を投入
し防ぎょに当たった。

10時14分 自衛隊、消防署の280名は頂上に配置したタンク車
からのホースを延長して稜線北斜面の延焼防止をはか
った。



11時29分 松形宮崎県知事現場指揮本部来訪

早生延岡市長
加藤消防長から
図上における火
点、延焼状況及
び現在の状況、
今後の対策等
についての説明を
受ける。



←早生延岡市長から
焼き状況の説明を
受ける松形宮崎県
知事

(出火点付近にて)

県知事、市長
から激励を受
ける消防団員

→



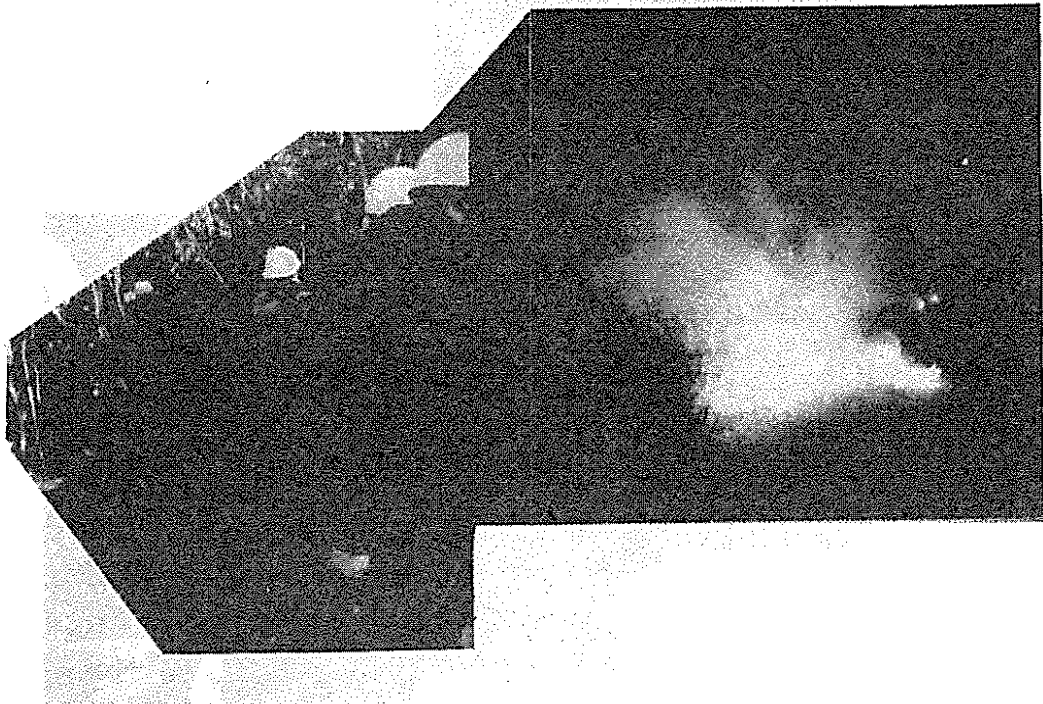
15時20分 延焼拡大する火勢も必死の防ぎょ活動により、ほぼ鎮圧状態となり、ジェットシューターによる残火鎮滅作業に入った。

15時58分 消防団は300名を警戒に残し、管轄分団（恒富分団）を自宅待機に切替えた。

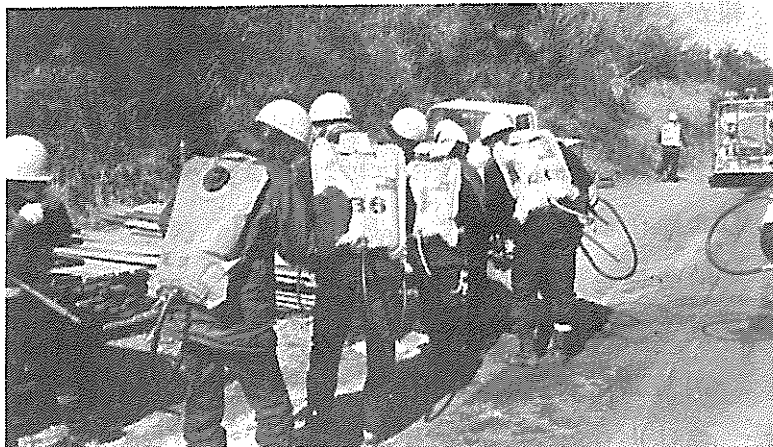
17時13分 空中消火作業を日没と共に終了する。

22時00分 自宅待機をさせた管轄分団（200名）を召集し、延焼危険、再燃火災に備え焼け止まり線に配置した。

23時00分 横谷で再燃、消防団を中心とした消防隊が出動した。再燃場所は主に焼失範囲内であり防ぎょ活動は北斜面を中心に徹夜で行った。



2月9日 8時00分 消防隊は頂上及び稜線両側を中心にジェ



ットシュー
ターにより、
残火鎮滅作
業を行った。

8時58分 ヘリコプター隊による空中消火を県知事を通じて再
要請、直ちに燃焼箇所の消火に当る。



- 9時40分 焼失範囲内の数ヶ所より煙上昇のたびに市民から通報があり、そのたびに消防隊を現地に派遣し消火に当った。
- 11時17分 各方面隊よりつぎつぎと鎮火の報告が本部に入るが完全鎮火のため陸上隊ジェットシューターと空中消火の共同作戦で消火に当る。
- 11時35分 消防長、署長、団長、現状確認のためヘリコプターによる空中視察を行った。
- 12時00分 消防団を状況により帰隊させ自宅待機に切替えた。
- 13時00分 焼け止り線を中心に残火鎮滅作業を続行した。



15時30分 ヘリコプターにより空中消火作業中止を決定し陸上での残火鎮滅を続行した。

17時20分 今後の対策について協議し、警戒隊を消防署隊を中心に編成して焼け止り線を中心に巡回パトロールを行うことに決定。

17時45分 管轄分団（消防団）解散。

19時00分 終夜巡回警戒に当たった。
再燃なし。数箇所から煙の上昇が認められるが焼失範囲であり、直接消火活動は行わなかった。

2月10日

9時50分 再度焼け止り線の確認作業を消防隊（署）3隊15名で三つのルートで実施し、発煙箇所の徹底せん滅のためスコップ、鍬で覆土作業を行った。

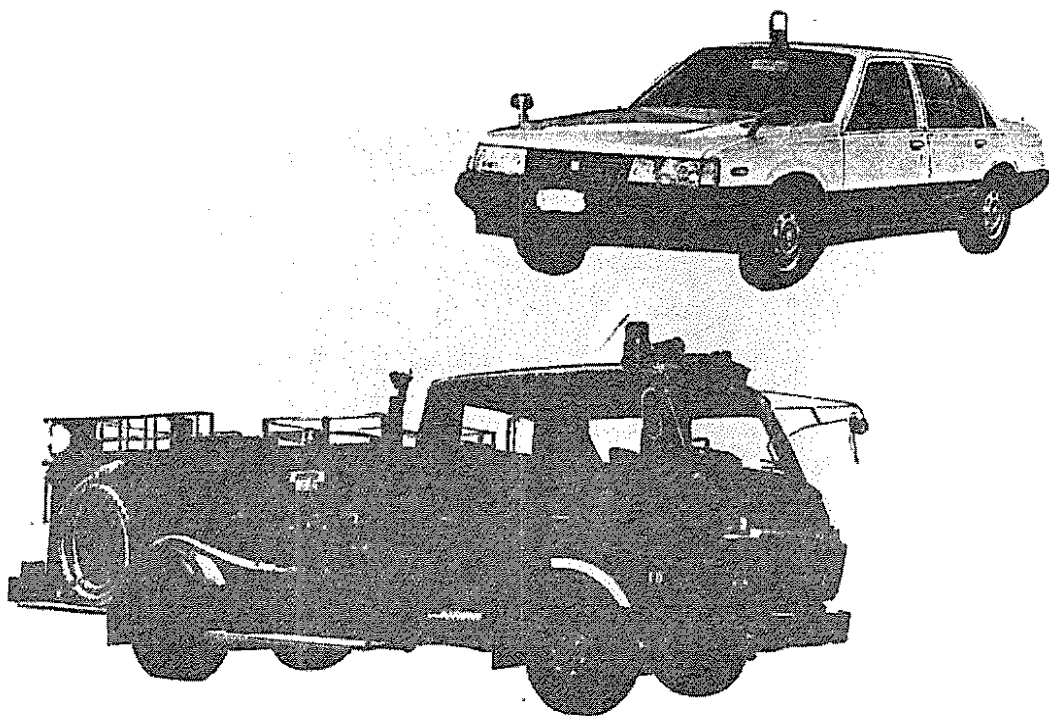


12時15分 現場指揮本部は、ほぼ鎮火の判断をし、指揮本部を
各関係機関に移動し解散、警戒については各機関で巡
回警備を行うこととした。

5. 広報宣伝活動

特に東南部にある延岡市立児童福祉施設「みどり学園」と老人福祉施設「若葉荘」をはじめとする風下の街区には濃煙と火の粉、灰が飛来し騒擾の様相を呈してきた。

このため指令車及び消防車により「防ぎょ活動が開始され人家への延焼阻止の活動が現に行なわれていること」を中心に広報を行い人心の安定をはかった。



6. 指揮本部の移動、設置

17時40分 片田町公民館に指揮本部を移動し、各関係機関が集結した。この公民館は、炊事場、和室の小会議室、ホール、放送室、公衆電話があり面積144㎡の木造平家建であり、片田町のほぼ中心部であるところから本部として格好の場所である。



本部には、消防本部、署団と延岡警察署及び関係機関をはじめ地元町内役員が詰め相互に連絡しながら情報の収集、指示の発令を行い様々の対策を講じた。

それには $\frac{1}{2,500}$ の図面で情報に基づく燃焼範囲や延焼状況を判断し、消防隊を無線指令により移動させ、あるいは地理に詳しい地元消防団員を伝令としての確な指示の伝達を行った。

また、2月8日 0時58分延岡電報電話局により仮設電話5台が取り付けられ、情報の収集関係機関との連絡及び報道機関がこれを活用した。

7. 延岡警察署の警備活動

2月7日 15時32分 火災通報を受信しパトカーを出動させ、主要道路の交通規制を実施するとともに火災の様相から長期戦を判断して主要場所の火災及び防犯監視態勢をとり91名を投入した。

また併行して原因等聞き込み捜査を開始し20名を当て情報収集を行った。これらの活動は警察署内の警備本部と現場指揮本部とが連携を

とりながら行われた。



この警備態勢は、2月10日まで若干規模を縮小したものの本部では徹夜で情報収集、警備等に当たった。

8. 自衛隊の活動

2月7日 22時00分 火災の拡大を予想した延岡市長は、陸上、空中からの消火の必要性を判断し、宮崎県知事に対して自衛隊の出動を要請した。

愛宕山の火災報道を見た陸上自衛隊都城駐屯地は、17時20分現場指揮本部に状況の問合せをし、更に「えびの駐屯地」からは、23時35分幹部4名が視察のため来本部した。



← 早生延岡市長
加藤消防長から
説明を受け、協
議中の自衛隊幹
部。

宮崎県知事からの正式要請を受けた陸上自衛隊「えびの駐屯地」からの隊員 241 名は、翌 8 日 3 時 34 分 愛宕山の展望台に集結した。

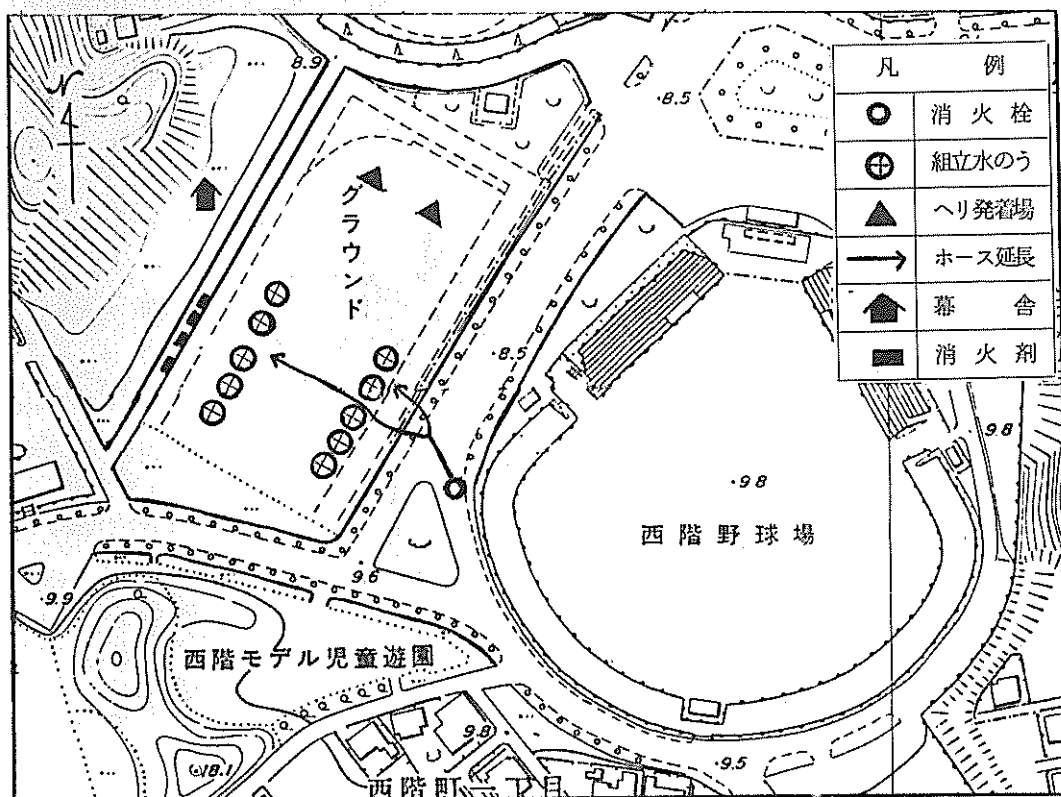
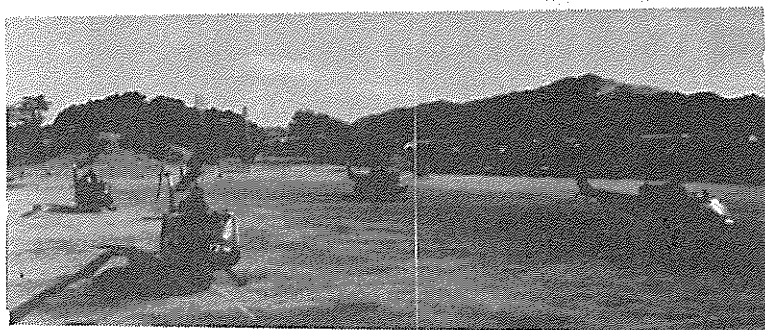


指揮本部から 2 名の現地案内により頂上テレビ塔から稜線に設けられた防火線添いに消火作業に入り北斜面への延焼拡大の阻止に主力を投入した。



2月8日 7時30分 佐賀県目達原町より陸上自衛隊西部方面ヘリコプター隊第1飛行隊5機が飛来、愛宕山より北西約2.6kmの市営西階陸上競技場を臨時のヘリポートとして待機した。

その後、熊本県＝陸上自衛隊西部方面ヘリコプター隊第8飛行隊2機が応援のため飛来した。



事前に連絡を受けた指揮本部は、関係機関へ協力を要請するとともに消防署 2 箇分隊（タンク車 1 台）を派遣し、消火剤の攪拌及び給水に当たった。



9. ヘリコプター隊の空中消火活動

2 月 8 日 7 時 40 分 消火薬剤入りのバケツを設置したヘリの一番機が延焼拡大中の西尾根方面に飛び空中消火を開始した。



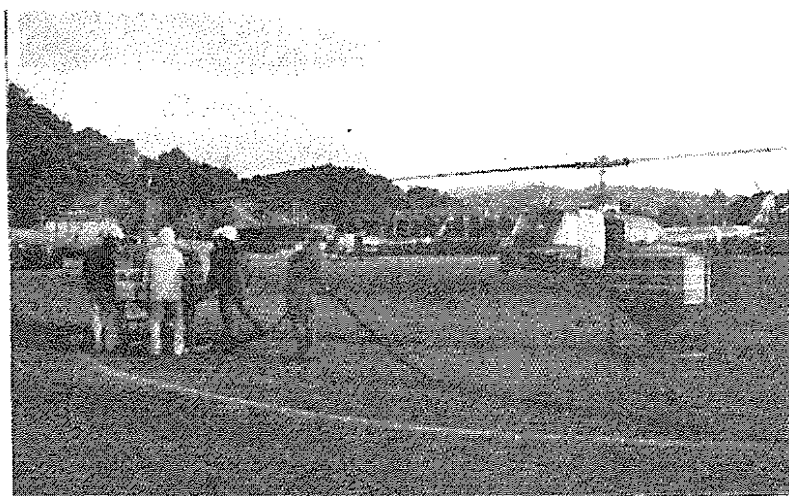
この空中消火は、気流の影響や山中にある高圧電線鉄塔（6,000 ボルト）等の障害物で延焼面に確実な投下がむづかしい状況であった。

本部では、状況を判断し最も消火困難でしかも延焼拡大危険の大きい稜線と北斜面への集中的散布を要請した。

空中消火は、5機のヘリが交代にヘリポートを発着し、連続散布の態勢をしいた。

空中消火の効果は、直接火面に散布できる部分では著しいものがあったが樹木の枝葉が繁茂しているところでは、効果が少なく陸上消防隊による誘導散布とジェットシューターによる注水と併行して消火作業が行われた。

空中消火は、2月9日 15時30分まで実施された。

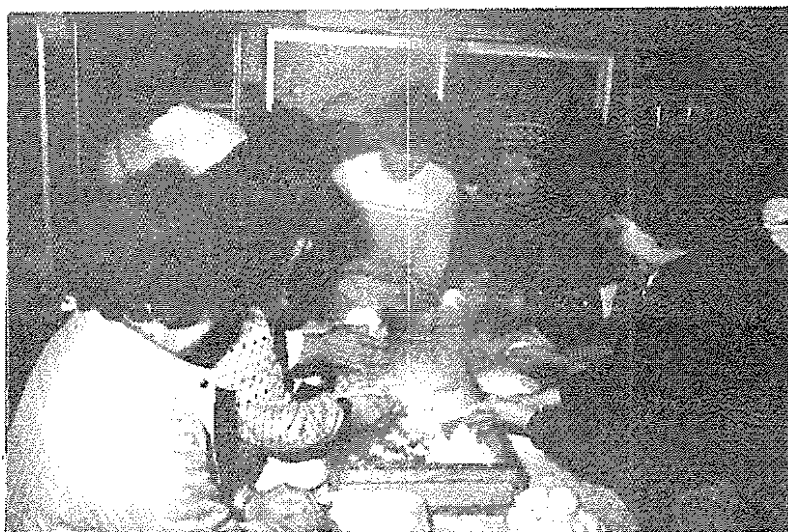


10. 炊き出し

長期戦を予想した本部は、町内会長（区長）に炊き出しを要請し婦人部の協力により大量の「炊き出し」が開始された。

この炊き出しは、片田町婦人部（部長 牧野スナ子 120 名）が各戸毎に炊飯を行い公民館に持ち込み「にぎり飯」をつくったものであるが、約 1,400 人におよぶ人員の給食としては間に合わず、農協から大型炊飯器（燃料プロパンガス 9 ㍓ 炊き）を借り公民館において炊き出しを行った。

また、各方面隊には三須町、小野町、若葉町婦人部が自発的に炊き出しをして差入れを行った。特に片田町婦人部では毎日深夜におよび 4 日間に作った「にぎり飯」は 8,000 個を超えた。



＊ ヘリコプターによる消火剤散布状況 ＊

＊ 使用器材（宮崎営林署所有） ＊

散布装置	バケツト	（ 800 ℓ 入 2 基， 1,000 ℓ 2 基）
混合機	攪拌機	2 台
揚水ポンプ		4 台（ 2 台のみ使用）
組立水のう		10
消防車		2 台
水利		公設消火栓

＊ ヘリコプター隊 7 機 ＊

◎佐賀県目達原町	陸上自衛隊西部方面ヘリコプター隊	
	第一飛行隊	5 機
◎熊本県	陸上自衛隊西部方面ヘリコプター隊	
	第八飛行隊	2 機
△型式	UO-I B	2 機（中型作業用）
	HO-I H	3 機（ “ 及び偵察機）
	OH- 6	2 機（小型）

＊ 消火剤散布状況 ＊

2 月 8 日	7.2 トン	飛行回数	107 回
2 月 9 日	2.45 トン	“	39 回
計	9.65 トン		146 回

◎薬剤の混合割合◎

△水	400 ℓ
△薬剤	60 ～ 90 k

★ 空中消火剤の使用状況＝総調達量 10.53 トン

○宮崎営林署	5.2 トン	(内訳)	M A P	3,420 kg
			F R 30 Y	1,300 kg
			C M C	480 kg
○県 林務部	3.89 トン	(内訳)	M A P	1,800 kg
			〃	1,690 kg
			C M C	400 kg
○熊本営林署	1.44 トン	(内訳)	M A P	1,440 kg

★ 出勤人員 ★

機 関	2月7日	2月8日	2月9日	合 計
東 旧 杵 農 林 振 興 局	28	59	40	127
宮 崎 営 林 署		12	10	22
熊 本 営 林 局		12	4	16
延 岡 営 林 署	27	21	13	61
延 岡 市		11	7	18
消 防 本 部		15	10	25
ヘ リ コ プ タ ー 隊		41	46	87
計	55	171	130	356

★ 出 動 人 員 ★

機 関	日	第 1 日 目	第 2 日 目	第 3 日 目	第 4 日 目	計
		従 事 者	従 事 者	従 事 者	従 事 者	
消 防 本 部		38	34	31	12	115
消 防 署		131	122	110	12	375
消 防 団		1,011	833	262	—	2,106
警 察 署		135	80	52	46	313
え び の 隊		—	241	—	—	241
ヘリコプター隊		—	41	46	—	87
東旧杵農林振興局		28	59	40	—	127
熊 本 営 林 局		—	—	4	—	4
宮 崎 営 林 署		—	12	10	—	22
延 岡 営 林 署		27	21	13	—	61
県 消 防 防 災 課		—	4	—	—	4
延 岡 市 役 所		50	95	30	—	175
片田町役員及び婦人部		90	80	80	—	250
若 葉 町 区 民		30	—	—	—	30
小 野 町 婦 人 部		30	35	—	—	65
三 須 町 婦 人 部		—	35	—	—	35
合 計		1,570	1,692	678	70	4,010

※ 人員は延人員である。

★ 出勤車輛（消防機関のみ） ★

◎消防本部・消防署…………… 75 台

- | | |
|----------------|------|
| 1. 水槽付消防ポンプ自動車 | 27 台 |
| 2. 消防ポンプ自動車 | 14 台 |
| 3. そ の 他 | 24 台 |
| 4. 軽 可 搬 | 10 台 |

◎消 防 団…………… 120 台

- | | |
|----------------|------|
| 1. 消防ポンプ自動車 | 10 台 |
| 2. 小型動力ポンプ付積載車 | 60 台 |
| 3. 小型動力ポンプ積載車 | 50 台 |

※ 車輛は延台数

★ 放水車輛 ★

◎消 防 署

- | | |
|-------------|------|
| 水槽付消防ポンプ自動車 | 15 台 |
| 消防ポンプ自動車 | 7 台 |
| 軽可搬ポンプ | 10 台 |

◎消 防 団

- | | |
|-----------|------|
| 消防ポンプ自動車他 | 40 台 |
|-----------|------|

合 計 延 べ 72 台

愛宕山林野火災防ぎ図

